

ダイクマン図書館における児童・YAを対象としたイベント分析

橋本ひとみ

社会の急速なデジタル化やグローバル化を背景に、公共図書館は地域コミュニティにおける新しい役割を期待されてきた。それに応えるため、北欧諸国をはじめ世界各国の先進的な公共図書館では、毎年多様かつ多数のイベントが開催されている。なかでも児童、ヤングアダルト(YA)を対象としたサービスが重要視されており、利用者ニーズに合わせた図書館空間を採用するために、利用者の年齢を限定するような図書館も登場してきている。

イベントの多様化に伴い、これまで様々な研究者がそれらのイベントが果たす役割を調査してきた。しかし公共図書館で実施されているイベントやその参加者グループを単体で取り上げて分析している研究はみられるものの、公共図書館のイベントの全体像を包括的に捉えた研究はほとんど見られず、どの対象者に向けてどのくらいのイベントが開催されているのかなどといった詳細な内容の実態に関する分析は不十分となっている。

そこで本研究では、世界的に見ても多種多様なイベントを開催しているノルウェー・ダイクマン図書館における児童・YAのイベントの特徴を明らかにする。この研究によってこれまで現地の図書館員でさえ把握することがなかった、イベント開催に関する基礎的なデータの提供ができる。研究方法は政策分析とイベント分析の二つである。政策分析では国が発表している政策白書を分析することで、公共図書館であるダイクマン図書館の政策にどのように関係しているのかを明らかにする。イベント分析ではどのイベントがどの頻度で行われているのか詳細を明らかにする。国が発行している政策白書と同時に分析を進めることで、国の指針がどのようにイベントに影響しているのかも考察する。

政策分析の結果、「公共図書館は国の図書館システムの一部である」と述べられており、国の戦略が図書館の政策に直接的に関係していることが考察できた。自治体に図書館の設置が委ねられている日本とは異なり、ノルウェーでは日本の自治体の業態区分で表現すれば、図書館の設置・運営は法廷受託事務とされており日本と比べて図書館の位置づけが高いといえる。また「図書館戦略において子どもと若者を対象とすることは特に重要である」と記載されており、児童・YAに対して積極的に政策を実行していることがわかる。

イベント分析では小学生向けのイベントが一番多く開催されていることがわかった。なかでも本に関するものが約半数を占めていたが、その他にも **Black lives matter** や **pride** に関するものなど、その時の社会に合わせたものも開催されており、異文化理解を促すことに加えて社会問題への意識を高めていると考察できる。またダイクマン図書館の分館として対象年齢を10歳から15歳に絞った **Biblo Tøyen** も登場しているため、児童からYAへの転換期に図書館政策の重点を置いているといえる。

(指導教員 小泉公乃)